

## 記念講演

# 「新版 はだしのゲン」 講演師 神田 香織 さん

### ■ 心待ちにしていた講演

教職員という職業柄、話のプロである神田香織さんの講演を心待ちにしていました。そして、神田さんの講演を聴く前に、著書を読ませていただきました。「講演師、見てきたような嘘をつき」と揶揄されることもあるようですが、歴史的史実を細やかに調べ上げ、作品として観客に届けるまでの苦労が記されており、ますますお会いするのが楽しみになりました。

### ■ 「悲しみの母子像」とオスプレイ配備

舞台上上がった神田さん、そのメリハリのある、表情豊かな声は、縦に長い会場の後ろまでハッキリと聞こえました。まずは、笑いを誘う落語、涙を誘う浪曲、庶民の怒りを代弁する講演…。それぞれの違いを聴きなるほど！ と頷きました。

福島県出身で、原発の問題にも並々ならぬ思いをお持ちです。厳しい下積みをした前座時代があり、下積みを終え開放感を味わおうと訪れたサイパンで万歳クリフに行きつき、そこで「戦争の悲劇」を語っていきこうとひらめいた…。全てが導かれるようにして今、目の前にいる神田さんにつながっているように感じました。

いくつかの作品紹介の中、印象に残ったのは「悲しみの母子像」です。この作品は、米軍ジェット機が住宅地に墜落した事故を題材にしています。被害に遭った若い母親と幼い2人の息子…私たちと同様、ささやかでもかけがえのない毎日を営んでいたはずです。もしこんな事故がわが身にふりかかったら…と思うと、恐怖と怒りがこみ上げてきます。この事故は35年も前に起きたものですが、根底に流れている問題点は、日本中を揺るがしている米軍輸送機オスプレイの



配備に関する問題とぴったりと重なります!! 35年前の事故が今、私たちに問いかけている、そう思いました。理不尽だらけの世の中だけれど、声を上げなければいけない時もあるのだと…。(そして、いつか読んだ「パパママバイバイ」という絵本を思い出しました。家に帰り調べるとやはり! この事故を題材にしたものでした。)

### ■ 力強い言葉で語られた「新版 はだしのゲン」

さて、いよいよ「新版 はだしのゲン」の講演です。広島原爆を題材に描かれた漫画「はだしのゲン」はあまりにも有名で、私も幼いころから何度も読んだ記憶があります。事情により音響・照明効果のない中、登場人物ごとに声色を変え、またその心情に合わせて語勢を変えて語られる神田さんの姿は迫力満点でした。また、情景描写によってさらに臨場感が増し、まるで私自身が「ゲン」になってしまったような気分になりました。悲しく辛い戦争の現実の中にも、明日への希望を見出して歩いていこうとするゲンとその家族の姿に少しだけ救われました。しかしやはり、二度と戦争を起こさない世の中をつくらなければならぬと、心の底から思いました。

神田さんの講演には、理由もなく悲劇に見舞われてしまう人々への愛と、その悲劇を生みだしてしまう者たちへの怒りが一貫して流れています。そしてその怒りを、信念をもって、力強い言葉で語り続けています。

ご自身もこの「新版 はだしのゲン」を語ることで、今まで生きてこられた…とおっしゃいました。そして、言葉の力をどこまでも信じている、そんな神田さんを



少しでも見習うことができたなら、子どもたちに還元できることがあるかもしれない、そう思いました。

最後に参加者の方の感想を掲載いたします。

・「はだしのゲン」もう一度読み直そうと思いました。目の前の家族をおいて、生きるために歩き出すシーン、ものすごくつらいものでした。現実にあったことかと思うと、とてもしんどいです。戦争は二度としない、原発も大々大反対です。

・こんな事が世の中にあっただと思ったら、悔しい思いです。

・話し手という点では教職員も似ているので、神田さんのように力強く、子どもの思いを受け止められる教職員をめざしていきたいです。

・あらためて戦争のおそろしさ、むごさを感じました。幸せにくらしていたたくさんの人々の命を一瞬にしてうばった戦争を決して忘れてはいけない、語りつがねばならない。そう思いました。

・一日一日を大切に生きようと思いました。

・神田さんのお話を聴いて、とても元気になりました。ご自身の辛い思いさえも、講談という形で発信していくその姿に力をいただきました。

・脱原発、平和への熱い思い、また弱者に対する優しさ、そういうものが神田さんの体の中心にあって、それが神田さんをいきいきと輝かせているのだな、と思いました。私もしんのある生き方をしたいです。

・唯一の被爆国が、原発事故を起こしました。全世界に核の恐ろしさを伝える役目を、日本人だけが担っているように思います。

・神田さんの声が前に出て、その場面が包み込むように現れて、とても感動しました。

・原爆投下直後の広島町がまざまざと目の前に浮かび上がってきて、イメージが鮮烈でした。

(文責：神奈川県母と女性教職員の会事務局)

